

海の合戦譚の兵法・語彙

— 付・『難波浦船戦記』 翻刻 —

青 木 晃

(一)

天正四年（一五七六年）七月十五日、石山本願寺の面前、難波浦（大阪湾）において、織田と毛利勢による海戦が行われた。

『信長公記』のこの日の記述——

七月十五日の事に候。中国安芸の内、能嶋・来島・児士大夫・粟屋大夫・浦兵部と申す者、七・八百艘大船を催し、上乘して大坂表海上へ乗出し、兵糧入るべき行候。打向ふ人数、まなべ七五三兵衛・沼野伝内・沼野伊賀・沼野大隅守・宮崎鎌大夫・宮崎鹿目介・尼崎小畑・花くまの野口、是等も三百余艘乗出し、木津川口を相防ぎ候。御敵は大船八百艘ばかりなり。乗懸け相戦ひ候。（中略）

毛利方七・八百艘の大船に対し、織田軍は三百余艘をもって、主に木津川口に防ぎ戦ったという。

か様候処に、海上はほうろく火矢など、云ふ物をこしらへ、御身方の舟を取籠め、投入れ／＼焼き崩し、多勢に叶はず、七五三兵衛・伊賀・伝内・野口・小畑・鎌大夫・鹿目介、此外、歴々数輩討死候。西国舟は勝利を得、大坂へ兵糧を入れ、西国へ人数打入れなり。

湾岸の岩に人数をいだして防ぎ堅めつつ、海上に激戦が展開された。しかし、この海戦の記述の中で、具体的な物は毛利方の投げ入れた「ほうろく」と「火矢」だけであつて、戦闘そのものの具体描写は残せなかつた。残さなかつたのかもしれないが……。

四囲に海をもつ国ながら、わが国に海の合戦記が多くあるとは必ずしも云えないようだ。ここに、東京都中央図書館・近藤海事文庫蔵『難波浦船戦記』なる一書がある。天正四年のこの海戦を描いた作品である。その内容の検討から、船軍の兵法とそれを謂う語彙を抽出してみたいと思う。

○ 天正四年六月十八日、大坂の阿門跡（無庵・紹意）から備州鞆なる將軍のもとへ、兵糧支援の要請があつた事からこの作品は始まる。その下意を受けた毛利・小早川両家の勢は、七月十日晩景に鞆を進発する。その軍勢は六千七百余騎、八百余艘の船団であつたと記する。

船団の進路は――

7・10 鞆（進発）

←

牛窓

←

7・11 江嶋

←

と順風（西風）に吹かれ、ここから難波浦へ物見舟を出している。

船団は五列に組まれ、その後左右を警固船がかためていた。

一方、毛利の東上船団を迎え討つ織田軍は一千余騎、五十艘の大船、三百余艘の小船を難波浦から住吉浜まで並べ立て、中に大鉄炮を積んだ番船を置いて備えていた。

物見の報告を受けた岩屋の船団は、村上水軍を先頭に数百艘の兵船が、

魚鱗二進（シ）ア帆ヲ連ネ

雁行二走（ツ）テ楫ヲ並ベ

海上をまるで陸で戦う如く進んだのである。十五日午の下刻に難波の沖に漕ぎ寄り見れば、丁度引潮で、敵船（織田軍）は干潟（＝浅瀬）に漂っている状態であつた。

「一向二軍ニナレヌ者ドモガ、斯ル干潟ニ大船ヲ浮ブルゾ。早

（ヤ）乗掛、討ヨ」

比較的浅い所で戦うのが船軍の常であつたとしても、引潮の浅瀬でうろうろ操船しているようでは、それは船軍に馴れぬ者と見え見えであろう。毛利水軍は、右に村上勢、左に乃美勢と二手に分れ、雁行の陣形から虎船に開いて、射手舟を先に攻めかかった。まず矢軍

して……陸で戦う如くと云ったが、陣形も戦法もほぼ同じに表現されているを知る。

一方、射手舟に続くのは盲舟、次いで炮祿・火鞠・火桶・抛松明の舟、更に鉾突・鍵掛・筒撞舟と、その働きを示す語彙で舟々は表記されている。

同じ毛利水軍の中にあっても、村上と乃美とに競争の意識があった、やや遅れをとった乃美宗勝が矢倉に這い昇つての下知の詞は興味ある。即ち、

「凡ソ舟軍ハ楫ニ心ヲ不_レ免。掛ルモ引モ楫ノ術ニアルベキゾ。
此所ハ干瀉ゾカシ。楫浅ニ廻スベシ。若(シ)舟動かバ脇楫ヲ
以(テ)堅メヨ。アユミノ板ヲシツカト付テ、武者ノ足立ヲ善
(ク)スベシ。誤(ツ)テモ舟ヲ横タヘ、敵ニ舟腹射サスルナ。
シケリハ楫ニ付テカザシ、幕ヲ湿ラシテ、猶モ舟ヲハヤメヨ。
櫓拍子太鼓ニ応ゼズハ、軍バサラヲ打テ、舟バタヲ可_レ扣。掛
声ハ怠リ付テ初メ、拍子ニ依テ定ムベシ。水夫勞レバ酒食ヲ与
ヘ、水ヲ捧ゲヨ。敵強(ク)競イ掛ラバ、扣テ息ヲ入(レ)ヨ。
敵怠ラバ、競(ツ)テ押セ」

これが、浅海に入つての船軍の戦術であらう。全ては操舟術にかかり、船団は拍子を合せて活動するのである。

(三)

織田軍の大船に盲舟(囲舟とも。楯かき並べて囲つた舟)で近付き、中筒などで打たれながら熊手・十ヶ鍵を投げかけて、やがて炮祿・火矢を投げ入れ、敵陣(船中)を焦熱の地獄と化さしめた毛利水軍、これは昔源平の赤間関の戦を思わせる激戦であつたと叙するのである。

数千石の根舟は、紀州根来の岩室法師清祐の鉄炮隊に迎えられて城門に入ったという。ところで、この根来の岩室であるが、根来の山伏や諸国の行者を集めて日用鉄炮隊と名付け、勝ちそうな方へは安価で合力、大事の軍と見れば金銀を多く要求するという輩であつたようだ。

毛利側のこの船戦記に、味方して来た根来の岩室など勿論のこと、毛利輝元の郎従井上民部大輔元成如き武士が登場し、在地性を示している。しかし、主だった両軍の武将は「信長公記」「難波浦船戦記」に共通する。

○

ところで、後に毛利家の側で編纂された『陰徳太平記』に、この海戦のことは見ておきたい。——(巻五十三、中国勢大坂の城え

入_二兵糧_一水戦并伐_二高松の松_一事)

大坂の城より兵糧の要請に、運載の船六七百艘、警固の水軍三百余艘が送られたと叙する。その船団の兵士には――

尾玉内蔵の允元助、栗屋内蔵の允元宣、香川左衛門尉広景、村上八郎左衛門景広、同河内守吉次、浦兵部の丞宗勝、野嶋大和守武満、同掃部助、同三郎兵衛景親、同備前守景盛、水谷孫四郎景忠、財満新左衛門、賀屋市介、山県、福井、神代包久、庄の五郎景勝、生口孫三郎景守、白井縫殿の允、南三河守、末永常陸の介景盛、磯兼左近大夫景通、桂上総の介、福岡彦右衛門、虫明弥左衛門、井の上又右衛門春忠、遠藤左京の亮、田所甚右衛門、嶋越前守、有地民部の少輔元盛等、

と詳細になり、播州室ノ津から物見舟が出されている。

信長方は木津川口を中心に大安宅（船）三艘と大小の軍艦数百艘を並べ、水路を閉していた。又、尼崎にも多くの軍船が陣をひいていた（荒木村重勢）のである。これらは、いずれも海戦の態勢である。

初戦は双方射手船を向わせること、敵船には押寄せ乗り移って戦い、乗取ること――それ以外に具体的な兵法の描写はない。毛利勢は「水戦」にうち勝って、楽々兵糧を城中へ運び込んだという。紀州から駆けつけた（室ノ津へ）のは、雑賀の鈴木孫市その人になっている。

（四）

巻尾、蛇足ながら、毛利勢の目に映った大坂城中の様も興味を魅かれる。

「飢（エ）タル僧俗男女、泥魚ノ水ニ逢タル心地シテ、躍（リ）勿テ喜（フ）事ゾ限（リ）ナシ」
の状態だった兵糧搬入時の城中も、やがて、

「食豊（カ）ナレバ忽其飢ヲ忘（レ）、此彼ノ矢倉門虎口ニハ僧俗集（イ）、白拍子遊女ヲ呼（シ）テ宴ニ触レ、或ハ轉賣シ、或ハ談義説法ニ日ヲ送り、親疎ヲ不レ扱金銀ヲ食リ、長袖ノ軍ノ評定 一向ニ決定セズ、年月ヲ送りシコソ無慚ナレ。」

という有様になってしまったという。これでは、本願寺勢の勝利はまずありえない。

○ 練達海賊衆（毛利水軍）は、要するに揖法・櫓術の達者ということなのである。

『難波浦船戦記』

凡例

一、東京都立中央図書館・近藤記念海事財団文庫に蔵される「三島流水軍伝書」写本四十四冊中の、難波船軍之事^中城中^中兵糧入事^一巻

(外題「難波浦船戦記」)を出来る限り忠実に翻刻したものである。

一、原本は紺色表紙、半紙本で、一面十行書きの墨付七丁、奥書きはない。

今日の段階では孤本の如く思われる。但し、別に「浪花船軍記」(九大蔵)なるものも報告されている。

一、本文に、清濁・句読点等は一切施さなかつた。振り仮名も、原本のものである。但し、(振漢字)のみ現行体を示す。

難波浦船戦記 全

難波船軍之事付城中江糧入夏

斯ケル處ニ天正四年六月十八日兩門跡無庵紹意備ノ州輦ニ至テ早馬敷浪ニ打其趣ハ織田信長六万余ノ奇ノ軍勢ヲ寄四面ヲ打圍當城難儀ニ及ト雖ノ君ヲ再帝都ニ皈シ奉ラント忠心厚力故ニ天人地ノ利ノ助ヲ得テ數日ノ合戦ニ終利ヲ不失候雖ノ然敵太軍相支テ糧道ヲ断候ヘハ内大勢ニノテ薪藪絶テ飢渴ノ難ニ可逢事眼前ニ候間急キノ毛利小早川ノ兩家ニ御下知在テ兵糧御助ノ成ニ於テハ父子弥丹心ヲ抽法衣ヲ脱堅甲利兵一オ

之姿ト成テ一戦ノ刃ニ掛腕御帰洛ノ院宣ヲ奏シノ可申事月ヲ不延草ニ覚候トソ歎訴被申ケルノ其外紀州雜賀播州別所荒木ヲ初トシテ

切誇ルノ由聞ヘシカハ將軍嘗感不斜毛利小早川ノ兩家ニノ御下知急リ也時刻延テハ城内費ニ乘スヘシト粟屋ノ右京大夫元信尼玉内蔵大夫元助乃美兵部丞宗ノ勝井上伯耆守春忠同民部太輔元成兩家之兵六ノ千七百餘奇海上ノ警固ニハ村上彈正忠景広八百餘ノ艘ノ兵船ヲ飾テ米五千石松每ニ積セ七列ヲ定ノ相卯テ立左右前後ノ備ヲ決シ七月十日ノ晚風ニ備一ウ

州ヲ漕出同日備前国牛窓ニ吹付タリ明レ八十ノ一日播州江嶋ニ著シカ共西風急リニ吹ケレハ是ノ願ノ所ノ順風ナリ急ヨ者共トテ亦帆引掛テ無程淡ノ路ノ岩屋ニソ著ニケル爰ニテ難波ノ様ヲ伺ヒ身ヨトノテ物見ノ舟ヲ出シケルニ敵方ニモ西国勢ノ貴上ル由聞ノシカハ伊勢国住人九鬼右馬允海上ノ警固ニ課テ間ノ鍋主馬兵衛尉沼野伊賀守寺田又右衛門尉杉原ノ兵部丞鎌太夫同鹿目介野口小畑尼崎以下ヲ初ノトシテ其勢一千餘奇大松五十艘小松三百餘艘ノヲ飾リ難波ヨリ住吉ノ岸ニ繼テ一面ニ掛並其中二其一ニオ

日番松ト号シテ大鉄炮ヲカキ入出舟入舟ヲモ不泄皆ノ討沈テソ扣タリ此消息ヲ善ク見切テ物見ハ淡路ニノ押戻シ角ト申セハ村上一手ノ者トモ進テ是非合戦トノ勇立同十五日ノ寅ノ刻計ニ淡路ノ岩屋ヲ押出ス數百ノ艘ノ兵船魚鱗ニ進テ帆ヲ連ネ雁行ニ走テ搦ヲ並槽ノ棹哥ノ声風波ニ応テ夥シク海上モ一片ノ平陸カトノアヤシカリケル形勢也扱コソ西海ノ賊船押来ソ一軍ノセテハ叶フマシト輦総取テ一

面ニ繫テ待請タリ毛ノ利小早川両家ノ海賊擄法櫓術之達者ナレハ十五ノ日ノ午ノ下刻ニ至テ難波ノ沖ニ漕寄見ハ此浦ノ潮ハ」二ウ

一刻早ケレハ太半引テ敵船ハ干潟ニコソ漂ケリ一向ニ軍ニノナレヌ者トモカスル干潟ニ大船ヲ浮フルソ早乗掛討ヨトテノ先ニ射手舟備テ左ハ乃美兵部丞宗勝三百余艘右ハノ村上一手五百余艘雁行ヲ麥シテ虎船開ク敵味方ノ互ニ矢軍シテシラミ合テ騒キシカハ時モ節モ吉シ掛レヨノト鯢波ヲ噓ト作りケル中ニモ乃美兵部丞宗勝ハ射手ノ舟六十余艘幕ヲ金股ニ掛サセ次ニ盲舟拾余艘炮ノ禄火鞠火桶抛明松跡ニ繼テ鉾突鍵掛筒撞舟ノ次第々々ニ備テ櫓拍子ヲ揃テ汀ニ付テ押掛シカノ村上一手ニヲクル、コト五六町カ程ニソ見ヘニケリ宗勝」三オ

是ヲ見テ拵広ニ越サレヌルハ無念也押セヨ者共ト匍ノテ矢倉ニ昇再拝取テ下知シケルハ凡ソ舟軍ハ揖ニ心ノヲ不免掛ルモ引モ楫ノ術ニアルヘキソ此所ハ干潟ソカシ楫ノ淺ニ廻スヘシ若舟動カハ脇楫ヲ以堅メヨアユミノ板ヲシツカノト付テ武者ノ足立ヲ善スヘシ誤テモ舟ヲ横タヘ敵ニ舟ノ腹射サスルナシケリハ楯ニ付テカサシ幕ヲ濕ラシテノ猶モ舟ヲハヤメヨ櫓拍子太鼓ニ応セズハ軍バサラヲ打テノ舟ハタヲ可扣掛声ハ怠リ付テ初メ拍子ニ依テ定ムヘシノ水夫勞レハ酒食ヲ与ヘ水ヲ捧ケヨ敵強競イ掛ラハ扣テノ息ヲ入ヨ敵怠ラハ競テ押セト舟端ヲ扣テ匍り呼フ」三ウ

サレトモ其日ハ南風ハケシク吹テ浪高ケレハ推セトモ舟不ノ行ケリ宗勝大ニ嘖テ櫓口ニ立タル水夫一人切テ落シノ其身ハ盲舟ニ乗移リテ真先ニソ進ケル水夫楫ノ取汗ヲ吞テ火水ニナレト押寄ケレハ景広一手ノ舟ノ二町計後ニ見タリケリ斯ル處ニ面ニ立タル楫取ノ野口カ舟ニ着ケヨト呼ハ盲舟着サセテハ叶マシトツノルヘ放ニ討ケル程ニ楫取レテ舳先ニ伏ヌ宗勝咄トノ見テ重テ出ヨト呼シカハ勇成男一人丁楯ノ開戸ハットノ押筈イテ先ニ射ラレタル死骸ノ上ニツ、ト立テ大音声ノニテ匍ケルハ射タリヤノ今物見セント云野口小畑カ兵」四オ

トモ是ヲ見テ一人当千ノ兵トハ是ヲカ云シ早射落ヨノト云俣ニ中筒カキ並テ四五十放ソ討タリケリ是モノ射ラレテ落ツ其隙ニ舟ヒタノト押付熊手十ヶ鍵ノ抛付タリ野口是ヲ見テヤサシヤ小松ノシカモ盲困ノ此大松ニシカセテ押沈メヨト呼ケルカ炮禄火箭ヲナノケ尽セトモ盲困ニ請留スシテ皆海中ニ墮入周章ノ折節己カ舟ニ取落シテ浪ノ烟トソ燒立タリ今ハノ野口モ叶ハシトヤ思イケン腹切テ炎ノ中ニ飛入ヌ亦ノ間鍋沼野カ舟ハ村上ニ責ラレテ大筒數挺ヲ鉤テノ討テトモ風荒浪高ケレハ雲間ヲ討テ甲斐ハナシ押」四ウ

廻シテ掛引ントスルニ太松干潟浮ケタレハ乗廻スエテ自由ナノラス小舟ハ射手ニ仕負テ逃散或ハ櫓械ヲ折テ浪ニユラノル、モアリ景広カ手ノ者トモ乗寄々々炮禄ヲ抛明松ノヲ打入シカハ數百ノ軍兵

共火中二焦レテ死ス是ヲ地ノ獄ノ罪人カ焦熱ノ炎ニ身ヲコカスカ如シ水主擲取水ノ底ニ沈モアリ浪ニユラレテ游モアリ熊手ニ掛テ引ノ寄セ舟端ニ引掛テ首ヲ刎ル其有様昔源平両家ノ長門国赤間関ニ戦ヒ平家討負海底ニ身ヲ沈タルモノ角コソアラメト過シ昔ソ思ハル、都テ八百余人ノ者トモノ討レテ跡白浪ノ音凱歌ヲ唱汀ノ千鳥哀ヲ促シ數」五オ

百ノ兵松モ水ノ淡トソ成ニケリノ城内鷲鳥ノ思ニ傾シカ難波ノ沖ニ數百ノ兵松見シカハノ擬コソ西國ノ軍勢推來レリト飛龍ノ雲ヲ得タル競ノニテ勇事コソ限ナシ其後軍有ト見エテ鉄炮ノ音ノ鯢波夥シ定テ此軍ハ三嶋ノ海賊ニテヤアラン左ノモアラハ勝利ハ疑ナシト愁眉ヲ開テ遙ニ見ハ一品ノ赤幡五流夕陽ニカカヤカシ晚風ニ閃カシ推來ル見レハノ甲冑ノ武士數百余騎静々ト歩テ城門を叩テ云ノケルハ是ハ將軍ノ御下知ニ依テ安芸ノ毛利輝元ノカ郎從井上民部太輔元成八百余騎ニテ馳加リ候」五ウ

門ヲ開カレ候ヘト呼リシカハ城門ノ守護人出合対面ノシテ懸テ門ヲ推開ク去程ニ奇手ノ勢ハ西國勢數ノ万騎馳加ル由兼テ聞ヘアリシカハ色ヲ失氣を吞ノテ扣タリシカ難波沖ニ軍始テ番松悉ク焼沈メラレシノ由聞ヨリ南西両所ノ者辟易シテ急キ囲ヲ解テノ取物モ取アヘス持楯竹抱ヲ皆捨テ天王寺平野ノヲ差テ敗北ス是ヲ見テ備後安芸両家ノ者トモ喜テノ數千石ノ粮舟難波入江ニ漕入タリ斯ル處ニ紀州根

ノ來ノ住人岩室法師清裕カ鉄炮一千挺左右ノ川岸ニ備其身ハ唯一騎錫杖ノ差物シ鎧ノ上ニス、カケ取テ」六オ

引掛芸州陣ニ馳向イ將軍家ノ御方ニ參テ候ノ其先ヲ掛ント進ケル此法師ハ昨日迄ハ根來ノ山ノ伏ヲ進諸國ノ行者ヲ集テ日用鉄炮ト名付可勝ノ方ヘ貨安ク合力シ大事ノ軍ト見テハ金銀太ク取ノ尽ントシケル奴原トモ今日何トナク御方ニ馳參事此ノ合戦必勝トヤ見ツル先ヲモ掛ケハ掛ヨトテ舟ヲ早メノテ急シカハ無程城門ニ推付タリ角數千石ノ兵糧ノ多ノ車馬ヲ率寄テ懸テ城内ニ納タレハ數日飢ノタル僧俗男女泥魚ノ水ニ逢タル心地シテ躍劔テノ喜事ソ限ナシ誠ニ今日ハ七月十五日佛地獄を開諸」六ウ

哦鬼ニ食ヲ施シ給日也今亦斯ル助成ハ軍ニ弥陀仏ノ他力ノ誓願不朽シテ數万ノ籠率先哦鬼道地獄ヲノ出極樂世界ニ如行拟モ毛利小早川両家ノ扶助依テノ衆命ヲ持事コソ有難ケレ是ソ万却ノ功德ヤトテノ西方ニ向テ手ヲ合ケル分野ハ極樂浄土ハ近キ中國ノ方ニソ見ニケリ何ソ遠キ拾万億土ノ佛ヲ頼マン近ノキ西國ノ助アラハ城ハ落マシ者ソカシ凡軍ハ可戰其ノ節ヲ泄ハ敵必其虛ニ乘スト云リ城内粮足リヌル上ハノ近日一軍シテ卷タル信長勢ヲ推拂ント議定ス左レノトモ食豊ナレハ忽其飢ヲ忘愛彼ノ矢倉門虎口ニハ僧」七オ

俗集白拍子遊女ヲ呼テ宴ニ触レ或ハ轉變姿賣シ或ハノ談議說法ニ日ヲ送り親疎ヲ不擇金銀ヲ貪リノ長袖ノ軍ノ評定一向ニ決定セス年月

ヲ送りシコソノ無慚ナレ左レトモ敵ハ何ツ引タルトモ不覺シテ自ノ
然ニ困ハ解ニケリ」七ウ

(奥ナシ)